

## ICT を活用した国語科からの合科的・関連的な指導の授業提案

— 学校と学校・教室と家をつないだ双方向オンライン実践の報告として —

前 嶋 深 雪

### 1. はじめに

尾道市立因島南小学校（津田秀司校長：2020 年 4 月～2022 年 3 月）より 2021 年度の校内研究講師としてお招きいただいたが、当時は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が始まって 2 年目であり、感染症に対する対策としては移動の制限や会食の禁止などを主に、夏から秋にかけてようやくワクチン接種が徐々に広まりつつあった年度であった。そのため、筆者は広島県尾道市にある因島南小学校への訪問を自粛し、オンラインを活用しての研究講師として参加を試みることとなった<sup>(1)</sup>。

社会情勢によって余儀なくされたオンラインでの校内研修や研究授業の見学、そして研究授業の協議会への参加となったが、本実践研究報告は、この機会を ICT 活用及び双方向オンラインによる学校と学校、教室と家をつなぐことでできることを見つけていく挑戦としてとらえ、どのような実践を試みたのかについての報告と、その分析及び考察を行っていく内容を持つ。

### 2. 双方向オンライン研修の試みと概要

2021 年度の因島南小学校の研究主題は、「全員が思考し、自分の考えをもつ授業づくりー読みの視点を明確にして読みとり、思考して書く活動を通してー」であり、11 月 6 日には「令和 3 年度「尾道版『学びの変革』推進事業」として授業公開を行っている<sup>(2)</sup>。この授業公開の際のオンライン参加を含め、6 月 8 日を第 1 回目として、2021 年度は計 6 回にわたり因島南小学校と川崎市の筆者宅をつないで研修を行った。研究主題である校内研究に加えて、図らずもオンライン研修となったため、ICT を教員の研修だけに活用するのではなく、授業づくりにおける子どもたちの学びの手法としてどこまで活用することができるのかというサブテーマも提案した。計 6 回のオンラインによる研修参加及び内容については【表 1】のとおりである。

【表 1】2021 年度因島南小学校とのオンラインによる研究参加（研究授業見学も含む）

回	日にち	内容	オンライン接続小学校
1	2021 年 6 月 8 日	○国語科全体研修：国語科教育「C 読むこと」 ○ Jamboard 研修：考えの共有 Jamboard 活用	尾道市立因島南小学校 大阪市立新庄小学校
2	7 月 30 日	○国語科全体研修：①国語科の学びと言語能力 ②国語科教育「C 読むこと」	因島南小学校
3	9 月 9 日	○校内全体研修：対話的な学び ～授業改善の視点「主体的・対話的で深い学び」と授業づくりの評価～	因島南小学校

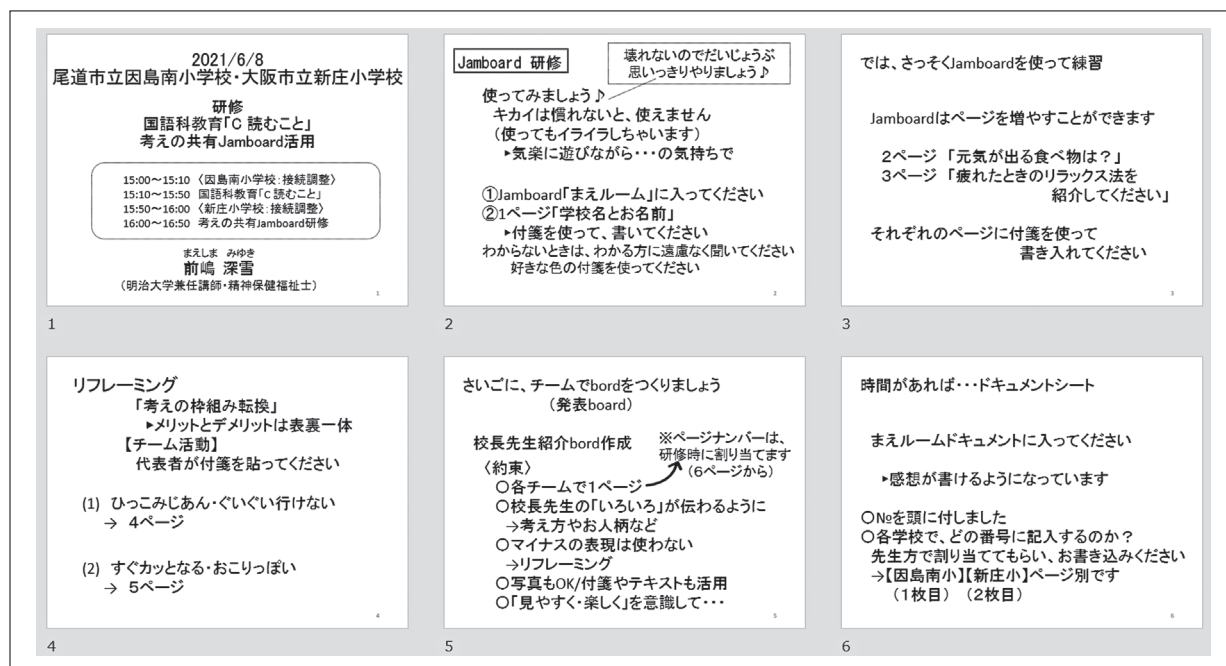
4	10月6日	○因島南小学校 国語科公開授業 授業見学 【研究主題】 全員が思考し、自分の考えをもつ授業づくり —読みの視点を明確にして読みとり、思考して書く活動を通して— ○講演：因島南小学校の研究の意義 ～新学習指導要領「主体的・対話的で深い学び」～	因島南小学校
5	12月7日	○4年生交流授業：「ごんぎつね」授業見学 ○国語科全体研修：国語科の学びと授業づくり ～合科的・関連的な指導の視点から「文学的な文章」の教材活用～	因島南小学校 大和町立吉田小学校 (宮城県)
6	2022年 1月18日	○国語科全体研修：国語科の学びと授業づくり ～学習の基盤をつくる「言語活動」～	因島南小学校 吉田小学校

すべての回で、オンラインツールはZoomを使い、Google Jamboardとドキュメントを使用した——Zoomを用いたのは筆者が大学授業にて扱いに慣れていること、これらのアプリを用いたのは、このたび参加してくださった小学校は3校（因島南小学校を主に、大阪市の新庄小学校、宮城県の吉田小学校）ともにChromebookを使用していることによる——。全6回のうちの3回は因島南小学校と筆者宅をつないでの授業見学と研修であるが、残りの3回は筆者と因島南小学校を主に、もう一つ別の地域の小学校との合同研修を行った。この合同研修のうちの1回は、2つの小学校の4学年のたがいの教室をオンラインでつないだ「交流授業」を展開することとし、双方向オンラインでの2つの教室の子どもたちがたがいの考えを見合う、考え合う、伝え合うという授業づくりに挑戦した。

2021年度の因島南小学校の研究対象は国語科であったため、このたびの交流授業は小学校4年生国語科教材「ごんぎつね」の授業である。本授業の挑戦によって、離れた地域の小学校間での双方向オンラインの授業展開についてはどのような学びの内容が適しているかについて、合科的・関連的な指導の視点での考察が可能となった。また、このような双方向オンラインにはICT技術の修得が欠かせないことから、すでに情報活用能力については両小学校で学習を深めていることを前提する。因島南小学校では双方向オンラインの回数を重ねるごとに、音声や映像の調整、Jamboardの活用のバリエーションなどの技術が高まっていった。双方向オンライン授業では、視覚的かつ聴覚的な心地よさを上げ、思考の交換と応答がスムーズにできる環境が重要であることが体験から理解できる。Jamboardを授業で用いるためには、児童がChromebookを上手に使いこなせるという前提も必要である。そのため、双方向オンラインでの交流授業は情報活用能力の育成についての目標が明確になることも利点となる。

### 3. 双方向オンラインによるICT研修の成果

離れた地域にある2つの学校間での双方向オンライン研修の第1回目は6月8日に行っている——このときは因島南小学校（尾道市）と新庄小学校（大阪市）と筆者の自宅（川崎市）をつないでいる<sup>(3)</sup>——。まずは、前半に因島南小学校の先生方と国語科の研究テーマに関する全体研修の時間を設け、その後、新庄小学校が参加をして、オンラインアプリでの共有体験を行った。研修の内容や流れの紹介は、研修時のパワーポイントの抜粋を【図1】<sup>(4)</sup>として次に示す——スライド中の「まえルーム」は筆者が作成した研修用Jamboardの名前である——。



【図1】6月8日研修時の筆者作成のパワーポイントスライド抜粋

第1回（6月8日）後半の新庄小学校が加わってからの Jamboard 研修の展開について、まずは、筆者が作成した研修用 Jamboard「まねルーム」の URL を両校の先生方に届けて接続してもらい、一人ひとりの先生が基本的な操作体験ができる時間を設けてから、だんだんと操作の種類と共有を増やしていった。

具体的には、1 ページ目に先生方ご自身の学校名と名前を書いて付箋を貼る練習、2・3 ページ目にも同様に「自己紹介内容」の付箋を貼る練習を通して、「付箋内容の編集ができること」「付箋の色が変更できること」「付箋の移動や大きさ、角度の変更ができること」等、付箋操作を体験して、自分の思うとおりに操作ができることを目的とした——時間があれば、お絵描きの機能や写真のアップロード機能も説明し、遊び気分で使ってみることもすすめた——。そのあとは、チームでの対話を通して付箋を作成して、全体共有するという体験のために、両校ともに3人か4人のチームになり、「リフレーミングの練習」という課題設定で、4・5 ページ目に「チームで話し合いをしてまとめた意見を代表者が付箋に貼る」とし、チーム対話をしながら付箋に書き込み、貼ったあとに共有するという体験を展開した。

最後に、6 ページ目以降に「発表 board」として、各チームで各学校の校長先生を紹介するページを1チームに1 ページ分を割り当て、チームごとの作成をお願いした——模造紙に1枚のポスターを作成するイメージで、Jamboard の1枚分を1チームで使ってもらうように伝えた——。ここでは、写真のアップロード、テキストボックス、線でのお絵描きや色を塗る等の付箋以外の機能も使って、取り掛かってもらった。完成後には、各チームのページを Zoom にて画面共有しながら、1チームずつ代表者に音声での説明を加えてもらい、全体発表及び共有を行った。これは、実際の音声と画像での発表によって参加している一体感が持てたこと、おたがいの Jamboard ページを見ながら、自分のチームでは活用しなかった使い方を共有する時間ともなった。

Jamboard 研修の終了前には、Google ドキュメントに研修感想を書いてもらい、同時に一つの文書共有及び編集の体験も行っている。研修アンケートの質問項目は、①お名前、②本日の Jamboard 研修の中での新しい発見、③感想や質問の3つである。研修の感想シートは「まねルームドキュメント」の

URL から入ってもらい、両校の先生にお一人ずつ回答を書き込むことができる同時編集の形式とした。

このアンケートに協力くださった因島南小学校の先生（14 名分）の回答は次のようであった<sup>(5)</sup>。（下線実線部・点線部・波線部は筆者による）

- 1) ② タブレットで全員の考えが一度に見られること、同時に作業ができることが、魅力的だった。空いた時間や、無駄な待ち時間がないので、クラスの全員が参加でき、使っている間は活動し続けることができる。  
③ ジャムボードの使い方や、教育で使用する ICT 機器の使用について、おすすめの学び方や動画はありますか？
- 2) ② 手書きで色をつけることができることを初めて知りました。ジャムボードを使用する際には、子どもたちと使い方の確認をしたり、場の設定が大切であることが分かりました。  
③ 実際に操作をしながら説明していただくことで、授業でのイメージをもって学ぶことができました。理科の時間にも ジャムボードを取り入れて実践していきたいと思います。
- 3) ② 手書き文字や画像、付箋などを使ってグループの考えを共有できること。グループの活動を写真に撮って共有するというアイデアを是非やってみたいと考えました。  
③ ジャムボードの使い方を実際に操作しながら教えていただいたのでとてもわかりやすかったです。質問が一つあります。ジャムボードに参加している全員が操作をすることができるため、ボードの形式や付箋が動いてしまうことがあります。操作ができないようにするには共有の設定を変更する方法しかないのでしょうか。
- 4) ② 自分の考えをもつことが難しい児童でも友達の見解を参考にしながら自分の考えを表現できることです。  
③ みんなで 1 つのボードを完成させる活動が楽しかったので、社会科や総合的な学習の時間等のまとめる授業でも取り入れてみたいです。
- 5) ② 声に出して表現することが難しい児童も自分の考えを伝えることができるということや、たくさんの意見を出してグループ分けをしていくことで深い学びにつながるということがわかりました。  
③ jamboard を活用できる教科や単元でしっかり使えるようにしたいです。他にも学習の中で活用できる方法があったら教えていただきたいです。
- 6) ② JamBoard を用いることで、瞬時にお互いの考え、気づきを共有できると思いました。  
③ JamBoard は、簡単に貼り付けたり、動かしたりできるので楽しかったです。簡単なことから練習をさせていき、活用していきたいと思いました。
- 7) ② 画像の添付をごく簡単にできるのがとても良いと思いました。また、同時進行ですることができるので、時間の短縮にもなると思います。  
③ 考えを広げていくのにとても有効な手段だと思いました。これから意見や考えを共有していく活動をするときに、活用していきたいと思います。
- 8) ② シートを活用することでさまざまな考えを共有したり、グループの考えをまとめたりすることができる。  
③ 本日の研修で初めてジャムボードを使い、私自身も楽しかったので、子どもたちも楽しく学習できると思いました。1 年生担任をしています。文字入力には難しいので、手書きなどで活用したいと思います。
- 9) ② 自分以外の考えが瞬時に見ることのでき、自分自身の考えとして共有できるため考えることが楽しくなる。  
③ 考えを共有する活動を行う際にはこのジャムボードを用いて楽しく学習を展開していきたいです。
- 10) ② 同時にいろいろな情報を共有できて、有効なことがわかった。  
③ 本日の研修を通して環境が与える影響が大きいことがわかった。
- 11) ② Jamboard を使って、同時進行で複数の考えを共有できることです。



③本日のアプリケーション等を授業や研修で活用することが当たり前になれば、場所や時間を問わず、様々な形態で、考え方等を交流することができると感じました。しかも、すぐに見ることができるので、新しい書き込みを待つ時間も楽しかったです。

12) ②一つのシートに全員で作業できる良さを実感できました。

③アプリケーションの活用力が高まれば、学校に来にくい児童が他の児童と同じ時間に学習を進めることができる可能性があると感じました。様々な可能性を探りながら、良いところを高め活用していきたいと思いました。楽しく学び、これからの授業にも活かしていきたいと思います。

13) ②ジャムボードで画像や手書き文字を使ってグループで一つの課題を作り上げることができることに驚きました。

③紙に書いて貼ったり動かししたりするよりも効率が良く、他の人の意見もすぐに見てわかるので思考が広がると思いました。早くクラスでも子供たちと使ってみたいです。

14) ②Jamboard の操作の仕方の簡単さ。

③実際にタブレットを使いながらの研修であったため、楽しかったです。授業の中で、タブレットを使用できる場面を設定して、子どもたちの学習道具の1つになっていけるように、今日教えていただいたJamboardを中心に取り組んでいきたいと思いました。

Jamboard 研修にて個人の活動及びチーム活動の体験を通して、「タブレットで全員の考えが一度に見られる」「グループの活動を写真に撮って共有する」「みんなで1つのボードを完成させる活動が楽しかった」「瞬時にお互いの考え、気づきを共有できる」「考えることが楽しくなる」「一つのシートに全員で作業できる良さを実感」「画像や手書き文字を使ってグループで一つの課題を作り上げることができる」「紙に書いて貼ったり動かししたりするよりも効率が良く、他の人の意見もすぐに見てわかるので思考が広がる」などの回答から、たがいの考えの共有ができること、グループで課題を仕上げることや共有の楽しさを同時に味わう体験となっていることがわかる。加えて、この体験により「理科の時間にもジャムボードを取り入れて実践していきたい」「社会科や総合的な学習の時間等のまとめる授業でも取り入れてみたい」など、教科や学習への活用の視点がすぐに導かれていることも教員が実際に ICT を一緒に活用してやってみるという形式の研修のメリットである<sup>(6)</sup>。

また、「自分の考えをもつことが難しい児童でも友達の意見を参考にしながら自分の考えを表現できる」「声に出して表現することが難しい児童も自分の考えを伝えることができる」「アプリケーションの活用力が高まれば、学校に来にくい児童が他の児童と同じ時間に学習を進めることができる可能性がある」など、発表が苦手な子どもや登校がスムーズではない子どもへの活用について、先生自身が体験することで、Jamboard 活用の可能性をすぐに見出していることにも注目したい。これは、学校と学校をつなげる ICT の活用だけではなく、登校がスムーズではない、あるいは登校が難しくなる状況が生まれた際に、学びへのアクセシビリティを確保していく一つの手法へと展開する可能性を含んでいる。このたびは感染症により筆者の自宅と学校をつなぐこととなったが、自宅や療養中の病院など教室以外での接続が想定される子どもへの学びのアクセシビリティ確保について考える機会となっている。

本研修により、ICT 活用にはまずは教員が児童生徒の立場で体験してみることの大切さを確認することができた。この体験により有用であることがわかれば、教員は授業でも使ってみたい気持ちが生まれしていく。このたびは筆者による Jamboard 活用の体験であるが、活用の仕方は授業の目標に沿っても変化するはずであり、活用手法は使う人数が増えれば増えるほど、バリエーションが増えてくるものである。Google アプリだけではなく、学校によってはロイロノートなど、さまざまなアプリを取り入れて

いるところもあり、どのようなアプリをどう活用するかという教材研究の一分野として、アプリの活用がより進められていくであろうことが予測できる。

#### 4. 4年生「ごんぎつね」交流授業

第5回（12月7日）には交流授業があり、その見学とその後の研修を双方向オンラインで行っている。交流授業では、教材「ごんぎつね」の「C 読むこと」に関する国語科授業としてではなく、国語科と学級活動、国語科と道徳科が関連する授業としての展開がされている。本時である11時間目は、小学校学習指導要領総則の「合科的・関連的な指導」となる内容である（後述）。

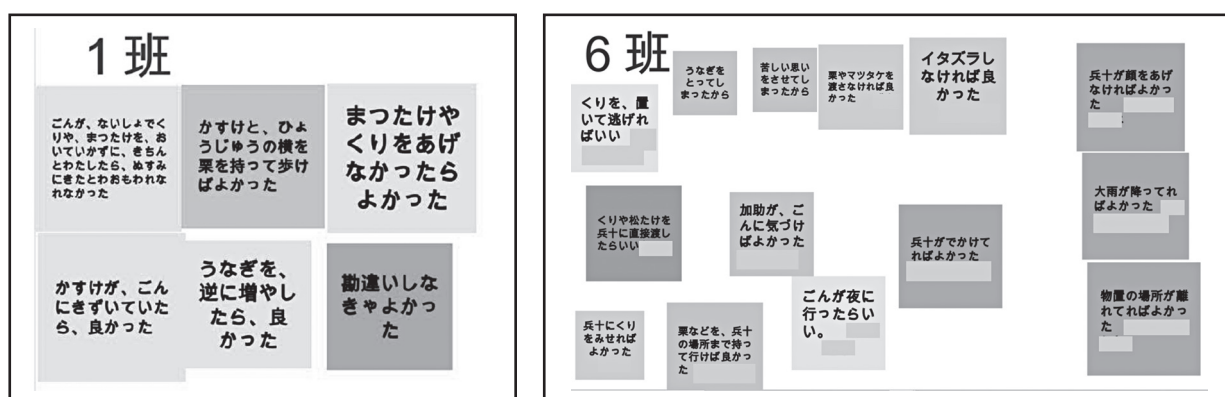
下記は、因島南小学校の新谷優果先生が作成された指導案にある、単元計画「9 指導と評価の計画（全11時間）」の抜粋である。交流授業は第3次の11時間目の指導内容となり、T1は新谷先生、T2として吉田小学校の河合萌先生のお名前があり、授業展開の主は新谷先生である。授業の環境はZoomで2つの教室と筆者宅をつなぎ、音声と画像の共有をしている。授業の準備物としては、教員と子どもたち全員がChromebookでJamboardを共有し、Jamboardの1ページ目に授業のねらいとして「登場人物がどのように行動していたら、ごんの結末は変わっていたのだろう。」を用意している。因島南小学校では5グループに分かれ、吉田小学校は1学年の人数が少ないため1グループとして、割り当てられた班ごとの1ページに付箋で書き込んでいる。

9 指導と評価の計画（全11時間） 本時 11 / 11 ※指導案から単元計画をそのまま抜粋して掲載

次 (時)	学 習 内 容	評 価 の 観 点				
		知	思	学	評 価 規 準	評価方法
一 (2)	○物語を通読し、学習の見通しを立てる。 ・物語を読んで、初発の感想を書いて読み合う。 ・物語を読み、内容の大体を捉え、学習課題を確かめる。	○			○ごんや兵十の様子や行動、気持ちを表す語彙を使って、感想を文章にまとめている。	発言 ノート
二 (8)	○各場面の中心人物の気持ちを読み取る。 ・第一場面を読み、ごんの境遇や性格を、叙述を基に読み取る。		○		○ごんの性格を、ごんの行動や様子、住んでいる環境の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	発言 ノート
	・第二場面を読み、兵十の気持ちや性格を、叙述を基に読み取る。		○		○兵十の性格やごんに対する気持ちを、ごんと兵十の言動の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	
	・第三場面のごんの心情を、叙述を基に読み取る。		○		○ごんの心情を、ごんの言葉や情景の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	
	・第四場面のごんの気持ちの変化を読み取る。		○		○ごんの兵十に対する気持ちの変化を、ごんの言動の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	

二 (8)	・第五・六場面のごんの気持ちの変化を読み取る。		○	○	○ごんの兵十に対する気持ちの変化を、ごんの言動の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	発言 ノート
	・第七場面前半のごんの気持ちを読み取る。		○	○	○ごんの気持ちを、加助と兵十の会話やごんの行動の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	
	・第七場面後半のごんの気持ちの変化を読み取る。		○	○	○ごんの気持ちの変化を、加助と兵十の会話やごんの言動の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	
	・第八場面のごんの気持ちを読み取る。		○	○	○ごんの気持ちを、兵十の言動やごんの行動、情景の叙述を基に捉え、想像しながら読んでいる。	
三 (1)	○物語を読んで、考えを伝え合う。(本時) ・どうすればごんは助かっていたのかを、登場人物の行動から考え、宮城県の大和町立吉田小学校と交流する。		◎	○	○登場人物が、どのような行動をしていればごんは助かったのかを考え、伝え合うことで考えを深めている。	発言 ノート

次に、本交流授業で作成した Jamboard について、1 班と 6 班のものを紹介する（個人の名前がある付箋は名前を隠した）。1 班～5 班までが因島南小学校、6 班が吉田小学校であり、因島南小学校は班で話し合いながら付箋をはり、吉田小学校では各個人がそれぞれ付箋を貼るという展開の違いがあった。



【図 2】交流授業時 Jamboard 抜粋

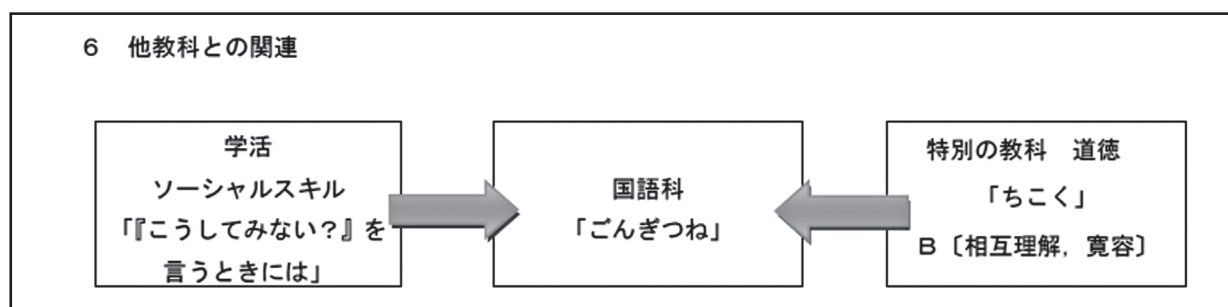
筆者が授業見学をして気づいたことは、双方向オンラインの環境として、音声が少し届きにくい状況が生じていたこと、Chromebook の使用やチームで話してからどのように Jamboard に書き込むかというものの体験の度合いがたがいの教室で異なっているように感じられることであった。このような視覚的

聴覚的な通信の安定の確保と、児童の ICT 機器への習熟度や扱い手法をそろえることの前提が存在するが、両教室の Jamboard 付箋からは児童の考えのアウトプットと共有がリアルタイムで行うことができている状況が見て取れる。これは、このたびの因島南小学校が挑戦した双方向オンライン交流授業が、その学習内容の展開手法として成立していた——たがいの教室の児童が教員の発問に対して Jamboard のページに付箋を貼り、共有する展開ができている——ということを示している。

双方向オンラインを可能にする環境の確保と ICT 機器の習熟度合いについての前提は、経験を重ねることで上手になっていくことは予測できるため、交流授業において今後に深めていくべきことは授業づくりであることが確認できた。これは、双方向オンラインにて発表し合い、見合うという交流だけではなく、授業展開として教室と教室、教室と自宅をつないで、考えの共有を行う授業づくりが可能であることを示唆している。

## 5. 交流授業における「合科的・関連的な指導」

11 時間目の交流授業の指導案には、「他教科の関連」について次のように図示している。



【図3】指導案抜粋「6 他教科との関連」

また、この「6 他教科の関連」については、本指導案の「5 単元について」(3) 指導観②に詳細な記述があるため、下記に示す。

②単元の終末には、読み取ったごんの人物像や行動を手がかりに、ごんの死の理由を考え、その死を防ぐには、どのようなことができたのかを考え、伝え合う活動を取り入れる。ごんの取った行動は、兵十に気持ちを伝えるには適切であったのかどうかを考えさせるため、相手と上手に関わるためのスキルを学ばせる。ソーシャルスキルワークを活用して、相手や場の状況を考え、思ったことをどのように表現すれば、相手に伝わるかを考えさせる。また、「特別の教科 道徳」の「B【相互理解、寛容】」とも関連させ、相手の立場や状況を理解し尊重しようとする態度を養う。

国語科の教材である「ごんぎつね」を「読むこと」による「学級活動」と「道徳」との関連が、【図3】「国語科「ごんぎつね」」に向かっている左右からの矢印によって示されている。本指導案には「合科的・関連的な指導」と明記はされていないが、小学校学習指導要領解説（総則編）「第1章第2の3の(3) エ 合科的・関連的な指導」<sup>(7)</sup>の解説には次のようにあり、交流授業の本時は「1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するものである」ことから「合科的な指導」と判断される。



本項は、教育課程全体を見渡して教科等間の連携を図った指導を行い、教科等横断的な指導を推進していくための具体的な工夫として、合科的・関連的な指導を進めることを示している。(中略)

学習指導要領における「合科的・関連的な指導」については、次のように理解する必要がある。

すなわち、合科的な指導は、教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つである。単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて、学習活動を展開するものである。また、関連的な指導は、教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するものである。(以下略)

次に、「国語」「学級活動」「道徳」の教科等横断的な指導について、国語科の学習指導要領から確認する。国語科の「C 読むこと」文学的な文章に関する第3学年及び第4学年の指導事項を抜粋する。

#### ○構造と内容の把握

イ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。

#### ○精査・解釈

エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。

#### ○考えの形成

オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。

#### ○共有

カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。

文学的な文章を「読むこと」では、登場人物の行動や気持ちの変化を読み取り、その理解や解釈のもとに感想や考えを持ち、共有し、たがいの感じ方の違いに気付くことが学習内容となる。つまりは、学級活動における「(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」の「イ よりよい人間関係の形成 学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること。」であり、特別の教科道徳における「B [相互理解、寛容]」であり、これは文学的な文章を国語科で扱った際に援用できる指導の提案ともとらえることができる。

国語科の学習対象は、小学校学習指導要領解説(国語編)に「様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。」<sup>(8)</sup>とあるように、国語科の学習対象は「言葉」つまりは「日本語」である。日本語の学習を深めるための「C 読むこと」では、言葉によって組み立てられた文章の中に配置される登場人物の行動や気持ちの読みが含まれているということ、この書記言語の日本語の学習である文章教材は、同時に道徳と学級活動にかかわっていくことを本指導案は伝えている。

このたびの交流授業という授業展開それ自体が、すでに普段の学校生活よりも幅広いコミュニケーションを前提するため、11時間目の本時を交流授業としたことは学習のねらいに合致する。国語科は言葉の学びであり、道徳は道徳的心情や道徳的判断力を養うという教科の目標の違いがあり、学級活動とも異なる。この3つの教科の学びの対象を明確にした上に合科的な指導が成立する<sup>(9)</sup>。本時の交流授業について、考えの共有を目指した双方向オンライン授業として、教科等横断的な指導となる国語科

を中心とした道徳と学級活動との合科的な指導内容は適切であったととらえることができる。

## 6. おわりに

「合科的・関連的な指導」に関しては、生活科や総合的な学習の時間が新設される以前に研究が盛んであったという歴史的な背景について、また教科としては国語科と算数科、図画工作科などとの指導の関連についても研究がされている<sup>(10)</sup>。このたびは、因島南小学校の実践があったことにより、双方向オンラインによる他県の小学校との「合科的・関連的な指導」には、国語科を要とする授業づくりが有用であることが指摘できた。これは、双方向オンラインの授業づくりには、その枠組みに適した授業内容を精査していく実践研究が今後に求められるということでもある。

これからの子どもたちは、情報活用能力を高めること、物理的な距離を乗り越えて、身体的な移動がなくとも考えの交換と応答ができるという前提で、社会の一員として生きていくための体験をしながらの学びが必要である。言語能力を高める要となる国語科を中心に、双方向オンラインの授業づくりという今後の研究の基盤をつくりあげてくれた因島南小学校の功績は大きい。

〈注〉

- (1) 筆者は2015年度(村上みどり校長)と2016年度(上野勝則校長)の因島南小学校の研究に参加しており小学校の建物や様子について体験している。また、津田秀司校長先生とは以前の赴任先の何校かの小学校に研修講師としてお招きいただき、約10年にわたる教育活動と一緒にしかかわらせていただいているため、共有のしやすさなどの関係性がすでに築かれているという前提がある。
- (2) 尾道市立因島南小学校HP「因島南小学校 教育研究」<http://www.onomichi.ed.jp/innoshimaminami-e/unei/kyoiku/kyouikukennkyu.html> (最終アクセス2022年1月2日)を参照。
- (3) 因島南小学校の津田校長先生は新庄小学校の的場校長先生と交流があり、研修を一緒にとお誘いくださったとのことであった。2021年度は5年生と6年生がZoomにて双方向オンラインの交流を行っている。5年生については、せとうちタイムズ(2022年2月26日記事)「因島南小学校 リモートで大阪新庄小学校と交流」<http://0845.boon.jp/times/archives/26062> (最終アクセス2022年1月2日)を参照。また、6年生が京都市立下京雅小学校と交流授業を行っている。せとうちタイムズ(2022年2月27日記事)<http://0845.boon.jp/times/archives/23284> (最終アクセス1月2日)を参照。
- (4) 見やすさを優先するため、スライド中のイラストや記号文字などの削除をしている。
- (5) アンケート回答は原文ママ。氏名は削除し、Jamboard研修に関する内容のみの抜粋とした。また新庄小学校への掲載許可の確認を筆者が失念したため、因島南小学校の先生方の回答のみの掲載としている。
- (6) 研修後、因島南小学校の先生方で「どのように活用したいか」のアイデアを出しながら、活用の仕方を模索してくださり、Chromebookを活用するメリットとデメリットも同時に共有していることをうかがっている。
- (7) 小学校学習指導要領のみに「合科的・関連的な指導」があり、中学校・高等学校では「教科等横断的な指導」という記述が主となっていく。
- (8) 小学校学習指導要領解説(国語編)の第2章第1節「1 教科の目標」にある「言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」のあとに続く文言である。
- (9) 河野(2009)p64には、石原(2009)の指摘を踏まえた考察からはじまり、「国語という教科教育そのものが倫理的な道徳教育でなければならない」と言及した上で「文学によって道徳感情を養うことができる」と述べている。国語教育は言語の学びであることを基盤に倫理的な道徳教育とつながる親和性があること、また、澤田(2017)p53に「道徳の時間における言葉の役割はきわめて大きく」とあり、言語能力が道徳教育の基盤となっていることを伝えている。
- (10) 山田・都築(2016)武田(2019)に国語科や各教科との合科的な指導の実践研究がある。また、山田・都築(2014)に1980以降の合科的な指導の動向や研究の歴史がまとめられている。

〈引用・参考文献〉

- 石原千秋(2009)『国語教科書の中の「日本」』筑摩書房
- 河野哲也(2009)「国語と道徳教育のための覚書」立教大学教育学科研究年報第53号(立教大学文学部教育学科研究室)
- 澤田浩一(2017)「道徳教育と国語科」国語教育研究第37集(早稲田大学国語教育学会)
- 武田文子(2019)「気付きの質を高める生活科の学習指導のあり方～国語科との合科的・関連的な指導による気付きの表出の効果的なタイミングと方法～」生活科・総合の実践ブックレット第13号(日本生活科・総合的学

習教育学会)

文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編』・『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編』・『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道徳編』・『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編』

山田丈美・都築繁幸 (2014) 「教科学的観点から見た合科的指導の実践研究の課題」教科開発学論集第 2 号 (愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻紀要)

山田丈美・都築繁幸 (2016) 「思考力・表現力を重視した国語科と算数科の合科的指導」教育実践研究第 1 巻 (中部学院大学・中部学院大学短期大学部)

〈謝辞〉尾道市立因島南小学校 (津田秀司校長先生)、大阪市立新庄小学校 (的場弥生校長先生)、大和町立吉田小学校 (藤野 準校長先生) には本実践研究を支える基盤をつくりあげてくださったこと、心より感謝申し上げます (各校長先生のお名前は 2021 年度のものとなります)。特に、因島南小学校の津田秀司校長先生には、教職員を支える管理職としての姿勢と子どもたちの笑顔をつくりだす行動力にいつも感服しておりました。また、津田校長先生をはじめ因島南小学校の先生方には、このたびの実践につきまして、細やかなお心づかいと惜しみないご協力をいただきました。まことにありがとうございました。